



日帰り・短期入院で 検査・手術を受ける子どもの看護

限られたかかわりのなかでの最大のケア

● 特集にあたって ●

日帰り・短期入院であっても、子どもと家族にとっては大イベント！

本特集は、検査・手術のために「日帰り」や「短期入院」をする子どもの看護に焦点を絞り、知識やケアの向上につながることを目的としています。

日帰りや短期入院で検査・手術を受ける子どもの最大の目標は、「予定どおりの短いスケジュールで安全に検査・手術を終えて、ふだんの生活に戻ることができる」ことです。そのため、医療者にとっては一時的なかわりになる子どもと家族かもしれませんが、本人と家族にとっては、検査や治療の必要性を理解し決心をする、家族内でスケジュール調整や役割分担をするなど、一大イベントになります。

また、子どもと家族は短期間で自宅に帰ることができませんが、相談できる医療者が近くにいないため、その子どもが受けた検査や手術に基づいたセルフケアが必要になります。実際、筆者はわが子が泌尿器系の手術のために4泊5日で入院した経験があります。そのときに調整しなければならなかった事柄は、「いつ、どこで手術をするか決める」「両親の仕事や日程調整する（筆者はまとまった休みを取る）」「手術日は祖父母とも日程を合わせる」「きょうだいをいつ、誰が世話するか決める」「入退院は誰が付き添うか」「面会はどうするか」「（遠方だったため）どこに滞在するか」など、多岐にわたりました。真夏であったこともあり、汗やプールで濡れた際の対処方法を保育園に説明したり、できる限り傷跡が残らないようする方法について情報を集めるなど、とくに創部について検討しました。

筆者は小児に携わる医療者なので、術前から術後までを

イメージして準備できましたが、まったく医療的な知識がなく、初めての検査・手術・入院であればイメージすることは難しいものです。そのため「日帰り」「短期入院」という、限りある時間のなかで子どもと家族にとって最大のケアを行うためには、いつも以上に予測をもったケアが求められると考えます。慌ただしく時間に追われる業務や長期入院・より重症な子どもへの対応が求められるなかで、短期間のかかわりになる子どもの身体的・心理的状态を把握し、時期を逃すことなく子どもと家族にとって必要なケアが行えることが重要であり、知識や根拠を十分に理解していることが必要になります。

本特集で選択した内容は、これまでの日帰りや短期入院に関する看護文献ではあまり解説されていない内容となっています。理由や根拠に関する具体的な解説と、それぞれの施設で実施されている検査・手術・ケアなどの特徴を紹介していただきましたので、日々のケアを振り返るきっかけになれば幸いです。

本特集の執筆者におかれましては、COVID-19対策が長期化するなかでお時間を頂戴いたしました。ご快諾くださいました皆様に、心より感謝申し上げます。

聖隷浜松病院小児病棟／小児看護専門看護師
村山有利子 Murayama Yuriko